

しかに清涼劑であつた。満場の聞手も皆さうであつたらしい、……が源藏の生酔本性違はぬ所、……端脱し得べからぬ所、……丹田に精氣充溢して居たかどうであつたか、此所一疑問であつた。

五 伊賀越沼津

緒方花溪
上

耳底に透徹る聲、……テツのない語り振、文句も空吞込で、よく重兵衛一類の性格まで會得せられた上だと、聴者も得心仕つたであらう。

六 おつま八郎兵衛鱧谷

三木
上

例の品のよい語り口、……天満の御大將と見奉つた。當夜のドツサリ、八郎兵衛の胸も張裂く無念の形相、……おつまの悲哀、……情あり、血あり……サスガにお手際といふべし、憾むらくは娘の假聲、……親の悲涙に調和せざりしやうなり、……

●女義太夫評判記

色眼鏡

播重席 竹本長廣 (一)

長廣と云へば、日本女浄瑠璃の修行場と銘打つて、晝夜開場(年中無休)大繁昌、大阪名物の一に



竹本長廣

數へらる、千日前は、播重席の、總大將大立者である、呂昇と長廣は、大阪いな關西の女義太夫の

龍虎である彼女の生れは米の生る木を知らぬ備前の國は岡山で、九歳の年に先の吉兵衛の弟子豊澤勝三郎を師匠にして名を廣勝とつけて教はつたがそも／＼彼女が淨瑠璃界の仲間入りをした始めである。然るに彼女は國元岡山では淨瑠璃會には度々出會したが、初舞臺は十五歳の年に大阪に来て日本橋北詰の澤の席で堀川を語つて所謂堂摺連を驚かしたが、始めである。それから十七歳に竹本長尾太夫の弟子に成つた。此の長尾太夫は稽古については至極く嚴ましかつた。彼女も度々煙管の雁首が御見舞をしたさうだが、彼女は此處が大いな事な處と、一心不亂に屈せず撓まず勉強をした効空しからず、彼女は十九歳の年(二十六年)に東京へ初めて上京た。其頃東京では先の綾の助けが非常に人氣者だつたが、彼女は、陸派席で翌年五月まで(二十七年)滿都を喧騒して其月末に歸阪た時には東京での大評判であつた事を涙を溢して喜んで談したそうだ。(東京の人氣者綾之助は彼女が上

京二ヶ月程して何處かへ行たさうだ。其後東京(度々)北海道、九州、各地方でも大人氣であつた。それから師匠の長尾太夫が亡なつてからは越路太夫(今の攝津大椽)の弟子となつて長廣と改名したのである。(其他各地方での彼女の艶罪其他の面白い事は澤山あるが、遺憾ながら原稿が非常に長くなるから次に載る)ラット忘れた、本名は多田おなつさんと云ふ優しい名だ。顔は瓜實で愛嬌がある。彼女の一笑は慥かに親や妻子を泣す力がある。(七八年前はなほさら)……彼女に淨瑠璃の所感を問ても、例の謙遜別に妾らの様なぶきような者は淨瑠璃のくふうなんか出来ずか、只御師匠さんから教なつた通りを語るばかりです、と云ふ風で、彼は藝人にめづらしい無口な感心な者だ。彼女の初めの弟子は廣勝(今はやめざる)である。今京都福眞亭で語る廣枝外二十と五六名(其内にやめたのが四五名)ある。……歳は五六に二三で、中年増盛りのほどの好き時だ。

同席 竹本小仙(二)

これも同じく播重席から出席ゐる者だ。前記の長廣は中年増の總指令官……總大將……だが、小仙は同席の花形……正に開かんとす蕾の花の……若



(影采の歳三十) 仙小本竹

ての人氣者の賣り出し女だ。……臍の緒を切つたは常市は南地とやら、姓は岩井名はあさの、當年漸く二八の半開の花、體格がデカイからハイカラ巻にコッテリト厚化粧をして、見臺を前に控わ

姿は、何人の眼にも十と八九に見ゆる。彼女が五歳の時、宅の裏に素人淨瑠璃の稽古屋が有つた……彼は裏の稽古所から日々に「今頃は半七さん」とか「去年の秋の病氣に」とか淨瑠璃文句を幼心に面白う、片言ながら真似て居た、處があまり其真似が旨いから稽古屋からも、すゝめられ、兩親も面白半分其師匠につかした。(其時は六歳)處が次第に好く語る様になつた。親もすきな道故、かはゆい一人娘だが、イツソ女義太夫にする氣になつて、十歳の年より豊澤捨三の門に入れた。が、彼女淨瑠璃稽古の中に尋常小學校へも入學し四年迄優等で卒業したとは感心だ。

彼女が、初席は十二歳の時(其年十月十五日)松屋町の支席に三勝酒屋を語り、各太夫及び見物連を驚かした。二日目(十六日)には、七つを語つた。(後より三つ)成程十歳より十六歳の當時迄、専心に稽古をしただけあつて、彼女が見臺を控わて、或は低く、或は高く、怒濤の巖に激するかと思へ

ば、玉を轉ばす石清水の如く、絃と和して、神に入る處六尺男子を三寸の喉に弄ぶかと思はれるが惜い事には聲が悪い、彼女も聲の悪いのは、非常に残念がつて居る。彼女の十八番は百度平や、菅原(僕は後を忘れた)お面は當世流行の丸顔にて別に取立程ではないが、色白の婀娜な質、氣質は年が年故、非常に無邪氣だ、小仙ちやん生れはと問へば日本、……意中の人はと問へば、知まへんとの中々の愛嬌者、只案じられるのは修業盛りを餘所にせぬ様に例の方は、こゝ八九年は出雲大社に延引てもらふ様に、尙感心なのは彼は此後萬一人からでも商賣をすゝめられても、決して他業はせず今のまゝ名もかへず、小仙の名で何處迄も打通して、竹本長廣の様に早く成たいとの意氣込だ。其から近々より晝席を休んで、暫時裁縫學校に通うさうだ。

あまり、ほめ過ぎるかしらんが目下當席の若手の

第一位を占て居る。今大阪で若手女義太夫番附を作らうものなら、三役は必ず請合の西瓜だ。……彼の好きな物は、山行と落語に、入道(入道は僕にはわからず)嗜好物ではおまんこに、洋食、サイダー、さらいな物は、遊船(海上)にお酒。

(竹本 讀込)

色もかはらぬ粹なる竹に

野暮な雀が来て口説く

風に品よくなびいておれど

根本動かぬ糸やなぎ

(小仙 讀込)

開きかゝりし二八の花を

誰か堂摺る事じやゝら

絃で惚させ文句で殺し

トロリとさすのは小仙嬢

次は……同席……豊竹小龍と……

……新町(義太夫)大西席……島子……

陰腹を切つて置いて「間に憎い奴あれど、云へば卑怯の未練の死」。

單純な女の致死期の愚痴の叫びだ。其亡びたのも、絶對的根本は夫を愛せずに戀して居たからだお藤であつたら、夫を愛したであらうが、お種は寧ろ夫の肉を戀した。だからお種が夫を戀する片言を見れば、何れも本能的要求の聲でないのはない。夫が小身者の悲しさは隔年の江戸詰、國に居ては城詰、月に十日は宿直番「夫婦らしいつばりど、いつ語ひし夜半もなしと、果敢なくも恨み夫の歸宅した時には「漸々と今朝の殿御の顔、見たぞや嬉しや來年までは、一つに寐臥もせうもの」と悦び、夫に不義を責られては「去年發足の前の夜の枕が限りの枕とは、今殺さるゝ今までも」と、悔ゆる。どれだけ官能の追求が甚だしかつたか分る。デ夫以上に自分の戀が出来る男があつたら、夫を選んだのに違ひない。夫婦の間の戀は

極めて危険であると同時に愛の夫婦の關係は平板單調である。所詮お種は妻たるに適して居ない。お種をして藝妓たらしめたら、必ず其處に深刻に現實を曝露した本能的の小説が作られたに違ひない。お種は全く藝妓に適して居る女だつた。(つづく)

◎女義太夫評判記(三)

色眼鏡

義太夫藝妓新町小山席 近太郎

と云へば四度目の狂り咲で、同廓義太夫藝妓近吉袖吉等と肩を並べてバリ／＼様の姐さんで、(一)の竹本長廣と同じ米の生る木を知らぬ、備前の國は岡山の槍一筋の姫君に御生れ遊そばされたのである。世が世であらば我々の様な素町人は、中々容易なことではお面を拜することは出来ぬ。思へば

御殊勝で涙が……此姫君は十と四五迄は御乳母日傘で、蝶よ花よと、一寸出るにも御手車で

(だから今でも御供の、箱屋を件れて)あつた、…

彼妓が十二歳の時住馴れた岡山をあとに、一家一門は大阪に引越して、北濱は心齋橋筋に彼妓の父

は貿易商を營なんで居たのである……父の死後

家事の都合上……彼妓は二八の觸らば浴む小肥の

見るから艶々しい無邪氣な時に、新町山下席に米

八(故人)の妹となつて名を「八べい」と披露て出た

が、そも／＼彼妓が花柳界の仲間入りの初めであ

る。彼妓は披露めの日から浮れ男に引張風の全盛

を極めた、……米八姉さんの凄腕の仕込みを請

け、蚤も殺さぬ可愛らし顔をしながら……ナカナ

カの下ウして、彼妓が二九の年には一人前の姉さ

ん連も及ばぬ程のエラ妓になつて、今〇〇會の〇

員を、九十九夜通つた深草少將の熱度以上に、

手玉に取つて、韓國合併より硬い約束で十九歳の

年根引され、小春と同じ新地に御極まりの他人

は小猫一疋で、〇〇さんと相對のチン／＼で暮し

たことが一年と三百四十五日……夫れほど思ひ

思はれつた中が、どうした拍子の舞篋やら……

「貴郎それでは愈々御別れですか」……あゝと一

言遺した後は口も淀みぬ……見れば涙が將た露

か、……嗚々語にきぬ／＼の生別れテナことに

なつたのである……其後彼妓は岡山に下り、岡山

名物戀者藝妓愛之助の樓石がい」に二度の勤めを

した……名は以前(新町山下席)の八べいのまゝ、

彼妓石がいに出てからも以前(山下席)にまさる全

盛で、某知事、阪本某、高崎某等を初めとし數十

名を骨抜きにし、遂に同地〇〇議員數十萬の家の

且那を、高尾に戀ひこがれた紺屋の六藏のやうに、

思はせ大枚の金で根引をさせて、料理屋を開業、

自用车迄も買入れ彼妓は其家のマダムとなつた。

「此且那は中々の好色家で彼妓を引す迄藝妓でも

六人彼妓(近太郎)が七人目である……夫れは好
いが、其旦那は御氣の毒にも其親旦那より其が爲
め押込み隠居となつたから、彼妓もいた仕方なく
其料理やを閉店して歸阪したのである。(其人の名
は清○専○○と云ふ)それはさておき彼妓が、石
がい(岡山)に出てまもなく井角が來岡した時に揮
つたことがある、それはかうだ、井角來岡さうさ
う或日某樓で數十名の藝妓を呼んだ、時に彼妓近
太郎)も其中の一人であつた。數十名の藝妓は井
角の座敷にいつたが何にがさて、同君の顔を見て
からは他妓も同君の前に出ない、其れは其はず同
君の顔を初めて見たら、氣の弱い者は其場で目を
廻すほどの顔だから……數名の妓は皆々其座敷
の外でモジ／＼して居たときに彼妓は平氣で單獨
井角の前にで……ラーキーニと、……挨拶をし
た。……時に同君は彼妓の顔を見て……ヤアー色
の黒い奴だ、お前でも藝妓かど云つた……時に彼

妓は、ヘイさようで御ざいます……が妾しは色が
黒いことはありませぬ、夫れは貴郎のお顔の其ミ
ツチャの黒い顔が妾しに反射して妾しの顔が黒く
見えますです、……とは……揮つて居るではない
か……其答へが、同君に非常に氣に入つて、彼妓
の名を反射藝妓とつけて、同君來岡の時は、反射
藝妓ならねばイケヌと云ふて、彼妓を大さうヒイ
キにしたさうだ……彼妓大阪に歸つて、北の新
地は銀杏から權平と云ふてまた／＼店出、此處不
相變の大人氣で披露まもなく、難波橋北詰の某間
屋の主人岡田某を手玉に取つて、遂に其岡田の手
活の花となつて、天滿橋四丁目に岡田支店と云ふ
て氷間屋を開業かせ、彼妓は其店の主人公となつ
て……彼妓自分草鞋穿て市内は勿論阪神間の町
村の得意を日々走り廻り、商賣大事と活動て居る
中に岡田は病氣に掛つた(昨年四月)彼妓は岡田が
寝ついてからは、着身着ま、夜の眼も寝ず付き限

りに厚い看護をしてゐたが、其甲斐なく病ついで三四ヶ月目に……戀人(近太郎)の手で安々と永眠したのである(其間約五ヶ年)其後彼妓或人に語つて曰く「岡田を失なつてから人生の樂みは全く腦裡より奪却せられ爾來世の無情を憐なむ」と……

……或粹士曰く、「近太郎よ、餘り焦心するな、……野心を起すな、時節が來れば、花も咲く、實も成る」……とは(御親切のことだ)……右をさ

つすれば、彼妓……今回(小山席)店出のは、氣紛三分、洒落三分、ヤケクソ四分であらう……彼妓今の(小山)からは本年四月から近吉(木原)の妹となつて四度目の珍咲である……彼妓岡田に引

されてから、浮世の波に揉折かれ、さんざ苦勞をした所爲か、此節はなんだか寝れて見わるが、まだ根の高い島田鼈でも結して、コツテリと厚化粧をさして突出さば、押しも押されぬ代物だ。品

の好い脊のヌラリとした質だから、ジミな衣裳に丸鬚姿に仕立て、汽車旅行でもすれば何々令夫人と云ふて誤魔化がきく、適當な妓だ、……顔は長面で頬には愛嬌露を湛てニツと笑みながら表情に富んだ眼を細くして、チーツと瞠め入つた刹那、



近太郎

たいていな男は盃取粉に掛つた蚤のやうになる……彼妓の感心なのは座持の點であらう如何な座敷でも一現と、馴染の差別なく、萬遍の愛嬌を振まいて客をテラさぬ所は、彼妓等の採るべきは當

然の勤めとは云へ待遇方を辨まへぬ當時の藝妓仲間では珍らしい妓だ。それから客の袴に着ぬことで、金の有る客でも氣に向ぬと厳しく脇鐵砲を呉れると……彼妓は義侠心に富んで、思はぬ借金を背負込むや、其れを見事やり通して、依頼れたことは何こまでも引請けて、其人の顔を立る(例の方は如何だか)が彼妓の彼妓たる所以であらう……彼妓は非常な器用な妓で、茶、生花、俳句、和歌、書、畫、圍碁、將棊、木遣、唄物、梅坊主物、詩吟、琵琶、尺八、三曲、箏曲、謠曲、聲色落語、新内、地唄、端唄、小唄、長唄、清元、常盤津、關東節、浪花節、チリツプチャラブ、劍舞踊り、跳り、蜻蛉返り、蹴る、毆る、引摺、吸附き、乗馬、弓、鐵砲、柔術(羽搔縮及び骨振流)劍術(八重垣流)相撲、其他何んでもこいで……客から何を所望されても、「決して忘れましたの知りませぬ」とは云ぬ。此頃はお年の加減が容易なこ

とでは一現の容には禪體踊りは見せぬ……彼妓の専門淨璃瑠は同廓での五本の指に折られてゐる十八番は忠六、百度平のやうな濼い物で好く語るが、をしい事には惡聲だ……尙感心なのは彼妓は毎月某日晴雨に拘はらず一枝の花を携けて戀人(岡田)の墓參りとは稼業柄に似ぬ殊勝のことだ……尙其人の位牌は彼妓の自宅にある、毎日彼妓は佛壇に向ひ懷舊の涙を濺ぎ未來の契りを祈つて居る……當時は清淨潔白、空閨を守つてをる。(どうだか保證不仕)彼妓は今母親(七十五歳)と只二人暮して、弟安太郎(十六歳)は越路大夫の弟子になつて修業中だ、……彼妓の淨璃瑠師匠は今橋の十造と、堀江の松谷其の他で……妹は(藝妓)房八が初めてお福他數名ある、……姓は松本名はうの、歳は子の七赤の水姓で、……彼妓の岡山時代の情人(玉島某會社の社員某及び當市の某其他)幾多多情多恨の歴史は書けばいくらもあるが、

……お輕の手紙に成からこれにて、筆を擱く。

(四)

女義太夫の親玉 豊竹呂昇

呂昇は美人の産地、……また遊藝に發達せる名古屋
市は、上宿に生る、父は同藩士で、永田爲吉と云
ひ、母の名は勇子、彼女は仲子と云ふ。……父
は維新後、同市江川町で乾物商を營みしが、彼女
の十一歳の時に父は病没したのである。爾來彼女
は母の手で養育せられたのである。……彼女は幼少
の時、非常のお轉婆で、日常の遊戯も、女兒とは
共にせず。常に男兒の群に入つて、小川に麥魚や
鯛を漁り、蜻蛉追、蟬捕、竹馬乗り、木登り、高
塚の上の馬乗りは常の事、男兒を嘗倒し、掴み合
の喧嘩は少しも珍らしくなかつた。……小川で游
泳を試みて溺れた事も度々であつた。或日に判官
切腹の芝居をして遊んだと云ふて、初めて締めた

新調の帯を見事に小刀で切つて戻つた。其時母に
問はれた答へは：「他の小供は皆嘘の切腹で面白
くないから、妾は本當の腹切をして此通りでし
た」と小刀を出した。……尙附近に同名の女兒が
あつたから、兩女の區別に彼女を男のお仲さんで
學校でも男のお仲が、通り名であつた。斯る性質
であるから、學校での遊戯其他の競争者は皆男生
であつた。……此男勝りの負ず嫌いは、成長の後
も變る事なく、勇往邁進は、彼女の特長で、此氣
概が今日の成功を得たであらう。……其後彼女は
常盤津を稽古して居たのである。處が彼女の叔父某
は非常な淨瑠璃天狗であつた。……其叔父が彼
女の音聲が如何に麗しく、……且其頃ひふりが
非凡であるから、……サワリの一節を彼女に教へ
たが、果して頗ぶる好い處があるので、熱心に淨
瑠璃を教へた。(其時彼女が十二歳)勿論叔父も、
母も、彼女を藝人にする氣は無く、只慰み半分

あつた。處が、當地の竹本浪越太夫（昨年故人となつた土佐太夫）が、或日叔父の宅を訪れ、彼女の稽古を聞き、太く感心して、叔父に向ひ、是非其彼女を弟子にせんと希望した、……叔父も喜んでそ



豊竹呂昇

れを諾した、……彼女は此浪越太夫に本式に稽古をする事になつた。（此時彼女は十三歳）……無邪氣にて可憐なる彼女は同人に就て、稽古を勵んだ。彼女が天稟の藝才は、日々に上達して暫時の間に仲子の名は嗜好者間にもてはやされた。……そ

れから彼女は藝名を仲路と名乗り、同地上宿の七福座と稱する席に補助として勤たが、そもく彼女の初舞臺である。……其後呂太夫、越太夫（今の住太夫）の一座が同地の千歳座に乗込んだ。……時に彼女は師匠を介して呂太夫、越太夫に面會を求めて、稽古を請ふたのである。……其時呂太夫は、彼女の熱心に感ずる處あつて、……試みに一冊を語らせた。其音聲は豊富で、語り口の如何にも延びくとして、非常に好いのに感じて、呂太夫は彼女を是非其弟子にと希望んで彼女の師匠、及び叔父、母にも頼んで、彼女を弟子にしたのである。……斯くして、呂太夫、越太夫の一座は千歳座を打上げ、一旦歸阪し、更に越路太夫（今の攝津大椽）と共に京都に興行をするになつた。……また彼女も小土佐一座に加はつて京都興行をする事になつた。……故に呂太夫は彼女と同車して汽

車中にて彼女の名を呂昇と變へたのである。……京都では大椽、呂太夫の一座は四條の南座、小土佐の一座は京極の席で開場した。……京都人は無論呂昇を如何な女義太夫であるか認て居ない……：が……：彼女の美聲で、艶麗なる語口に忽ち大人氣を呼び、最初の十日間の約束は一ヶ月餘になり、上落後連夜満場の好況で、京極の諸興行を壓倒したのである。……夫れから一座は同席を打上げ、名古屋に歸つた。……彼女は大阪の本場所を修業をする決心をして、彼女十九歳の時に、明治二十五年の六月、初めて大阪に來たのである。……其當時大阪の女義太夫席では清津橋の播重席と、道頓堀の金城席（今はなし）と、天満の南歌久席等で……：太夫は……：照玉……：東猿……：末虎……：長廣等で、いづれも相當な人氣を有して居た。……：彼女は名古屋に居た時で藝人を以て世に立んとは少しも思はない（叔父、母も同じ考へで）……：が……：彼女が非凡

の技が自然と人氣に投じ喝采を博し、知らず識らずに、……：藝人の群に交り、勸めらるゝまゝに小土佐の一座に加はり、補助として各地を興行したのである。……：偶然にも呂太夫を師として大阪に出で、大阪の淨瑠璃界の名古屋と違ひ、盛なるを目撃し、又女義太夫も名古屋で想像したともかはりなく……：是ならばと云ふ自信より、愈々身を此社界に投じ、少なく共々、女義太夫界に光彩を放たんと野心を以て、……：茲に始めて、藝人で世に出んと決心し、……：呂太夫に就て一心不亂と稽古を勵み、文樂座を斯道の學校と心得、同席興行ごとに、……：日々床本辨當を携へて通ひ、苦心慘憺半年餘……：其内に播重席主播に見出されて、同席出勤となつた……：其時播重席は、東猿を眞打とし、長廣其他の人氣者を集めて居た。……：彼女は突出し三枚目に据られたのである。……：技藝は兎も角、斯道に於ていたく見くびられた名古屋仕込

の彼女が突然此重要な位地を占めたが爲に一座の不平を惹起し、果ては不平運が合同して、彼女の排斥を企つた。……彼女は旅鳥の悲しさ、……自信と、決心とに強き負ぬ氣の彼女も、流石に女性の心細き感を起して引退を思ひ立ち、席主に其意を漏した。席主は深く彼女に見る處あつて、種々に慰諭し、遂に不平運數名を斥けて、彼女を眞として興行を續けた。……處が、彼女の美聲は早くも嗜好者間に喧傳して、播重席に連夜大入りの盛況を呈した。……斯くて……彼女は同席勤續滿五ヶ年の久しきに亘つた。……此間同席は呂昇席とまで稱せられた。……其後彼女は同席と……都合上……關係を絶つた。……時は明治三十年の三月、……彼女が二十四歳の時、……彼女は此間縁も由りもない旅に出て、之と云ふ後援者があるでなく、全たく孤立の身を以て斯まで成功し、其名を滿都に知られたには、……彼女の技藝が天品に出づる

とは云へ、……此間に練磨研究……苦心慘愴……幾多の辛酸を嘗て成功に達せんとして、播重席を去る。如何なる事情の有るにせよ……五年間の……辛抱を……一朝にして抛げたには必ず……よくの事があつたであらう。……彼女は此時にいたく世の無情を感じ、播重と關係を絶つと同時に、名古屋に歸らんと決心した。(其間に他席より屢々招聘されたがどれも應ぜず)……處が……平素彼女の技藝を賞して愛顧を垂た某三四の紳士が、……さまざまに慰諭し、歸國を思ひ止められして、……自ら後援者となつて、其當時……一方の重鎮にして技倆また振群の聞わある照玉、末虎等と共に、一座を組織せしめ、都保美連と命名して北區曾根崎橋南詰の萬亭を改築し、同一座の定席として、愈々此處に旗を擧る事になつた。……既に南地において盛名をあげた、彼女等一座は、北地に來つても大に歡迎され、開席早々非常の人氣

を博し、……暫時にして都保美の名は遠近に傳は
 りて、他の連中を殆んど壓倒するに至つた。……
 然るに不幸にも僅か半年餘りにして、萬亭は不慮
 の火災に遭ひ一座は三味線見臺肩衣より小廻りに
 至る迄悉く焼火し殆んど再び起つ事能はざる程
 の打撃を蒙つたが、……すでに此時は女義太夫も位
 地を高め、世間より以前に勝る待遇を與へられ、
 一座も頗る心強き感をして居たが、……彼女呂
 昇獨りは播重以來一種の神經を起し、再び名古屋
 に歸らんと思ふて居たが……同情深き某氏の勧め
 に彼女死ば諸共と覺悟をし、今一度び旗を揚げる
 氣になりて、堀江の明樂座に打ち出た。……此時一
 座は其運命を決するは此時なりと懸命の力を絞つ
 て勵精した其効空しからず、……萬亭に勝る人氣を
 得て五十日間連夜札止め的好況を呈し、再擧の旗
 は見事に花を飾つて、一座は元氣大に復活した。
 一時歸郷の念を起した彼女も翻然として再び決心

の臍を固め、此上の目的は大阪の地に遂んど心に
 誓つたは此時である。……之より先き彼女の名
 は獨り大阪のみならず、四國中國九州にも聞けた
 ……九州の某興行元より(明樂座興行中)招聘の交
 渉に接したが、……此時は萬亭の災厄後、尙又明
 樂座の人氣は少しも衰へず、一座の名聲は日増し
 に揚りつゝあるので、今暫らく大阪に在つて其根
 底を堅めんと思ふが、先方より再三の請求に逢ひ
 最早辭する言葉もなきに至つた。……旅稼ぎの瀬
 踏も一興ならんと、遂に之れに應じて、いよ／＼
 九州行となつた。……先づ博多に至り、夫れよ
 り久留米、佐賀、熊本、八代、長崎を経て更に若
 松、小倉、中津、行橋、直方、飯塚、二日市等を
 興行した。……由來九州は藝道に趣味を有する土
 地柄で、殊に淨瑠璃は最も嗜好する處である。……
 ……攝津大塚の一座も、大隅の一座も度々赴つた處
 である。……之と云ふ名ある太夫こそ出でざるも

素人天狗も随分盛な地である。……彼女呂昇は是等に事情を聞き知てをる故……愈乗込と決するや、彼女は多少氣に掛つたと見ゆ、平素恩師と仰ぐ故豐澤廣助が大椽の一座に加はつて九州行の經驗あるより、同人の許に行き……同人より九州の事柄を悉々説諭を受けた。彼女も深く信頼する同人の事なれば大に喜び、心安き思ひをして喜び勇んで出發した。……斯くて彼地に乘込ても、常に廣助の言を守りて得意とする外に心をそらさず慎重に、眞面目に、且つ熱心に勤めた。……果して到る處で、非常の人氣を得、各地共日延べに日延べを重ねて、前後六ヶ月の長きに亘つた。……榎座(長崎)三十日間、蓬萊觀(中津)二十三日間、東雲座(熊本)二十日間、朝日座(小倉)十五日間、恵比須座(久留米)十五日間、朝日座(若松)十日間、等何座も一流の劇場で名ある俳優でも長く興行をした事は稀であるさうな。(つづく)

◎朝鮮と義太夫

竹本叶太夫

私が韓國に渡航致しましたのは、一昔の十年まへ、三十四年の八月で京城の御最負の方が、一度韓國へ遊びに來いとの事で、丁ど交樂も夏休みの時である、松葉屋の豐之助と二人で、商船會社の木曾川丸で行きました。扱釜山へ着くと、山の景色、海の色、韓人の風俗、何れも目に新らしく、出港に間が有りましたので、釜山へ一寸上陸致しましたが、港近邊は、日本の町計りでした。韓人の家は少し奥へ這入らぬと有りませんでした。夫より木浦へは上りませず、仁川の港へ丁ど大阪を出まして五日目に安着致しました。其頃仁川には、義太夫が大流行で、大阪より豐澤團三郎が師匠として往つて居りました。又女太夫妻鶴といふ師匠もありまして、團三郎の方は杉の木會、妻鶴の方は矯風會、双方とも銀行、取引所林の立派な御連中計りでした。或日仁川大草旅館で双方合併で大會

ります、序ながら歌舞伎の方では盛綱に次で母の微妙に重きを置いて居るやうですが淨瑠璃の方では盛綱から時政、夫から微妙といふ順序で御座います。(井上松園)

評判記

女義太夫評判記

色眼鏡

(四) 豊竹呂昇(つゝん)

彼女呂昇が中津(蓬萊觀)に興行中、或日一座の未虎と共に有名なる耶馬溪に遊んだ。名に負ふ天下の絶景も彼等には左程迄に感興を興へなだたが、獨り峭料たる巖石を削りて人工の奇を畫したる、羅漢寺に到りては兩人共に無限の興を催し、案内の僧に導かれて隈なく參拜を遂げた。時に一人の

老僧出て来り、優艶なる彼等を頻りに訝かりつゝ、一室に招じて、御身等は何處から来たられたを問ふた。彼等は只大阪から下つた藝人であると答へた。老僧、さては此頃中津にて評判高き呂昇であるかと歎待し、御身達は勸善懲惡を説く職掌柄にして謂はゞ世道人心を掖整すべき教導職である。斯る靈地にさる神聖なる藝人の參拜する事、佛も感應ましますべし。左りながら藝人には惜しい容姿をもたれ、定めて世に浮きたる若者共をあらぬ迷ひに苦しめらるゝが多かるべし。イデ拙僧が案内し、罪を作れば此通りなる事を示すべしとて、自ら先に立ちて同寺の有名なる地獄極樂の洞窟に案内する。犯せる罪なき彼等二人も、引かるゝまゝ、黒暗々たる洞窟に入りて、老僧より地獄の狀は斯くかくと物凄き有様を説き示されたる時は、流石に身の毛よだちて容易に直らず。四里の行程を中津に着く迄、腕車の上に顛ひながら念佛を唱へ

て居たさうだ。今も尙當時の狀を人に語つて罪惡の恐ろしい事を戒めて居ること。流石女性の優しい心はさもあらう。

又彼等一座が長崎興行中には同港居留地の外國人が呂昇の盛名を聞いて續々來場した。素より彼等が淨瑠璃を解する筈はないが、何しろ日増しに外人の客が殖ねて來た。これは



豊竹呂昇

全く彼等が好奇心に驅られて聲曲を聴くよりも、むしろ演者の容姿を觀に來たのであらうが、美妙なる三味線の奏調に連れ、流麗なる聲音を發するのを聴く時は意味は解らぬながらも彼等は無量の快感を受けたに相違ない。從來同地では何種の演

藝にも斯くの如く多くの外國人を呼んだ事は無いといつて興行主は不思議の感に打たれたさうだ。

さて彼等一座は愈々九州の地を去る事になつた。

一座は初めての旅稼ぎに十二分の成功をなし、喜び勇んで若松港から瀛船に投じて馬關に乗り込んだ。同地では辨天座で十日間興行し夫より廣島、尾之道、岡山、姫路、神戸を打ち更に高知(土佐)に渡つて短きは十日間、長きは三十日間も興行して、到る處好評を博し、大阪を出てから十ヶ月間の長旅をして漸く大阪へ歸つたので大阪でも珍ら

しがられ、あちら、こちらの寄席や芝居へ招かれ、其間に京都、奈良、堺、神戸、和歌山等へも出稼

ぎをしたが、呂昇の名聲は此時からますます發揚して遂に關西女義太夫界の驍將となつたのだ。

斯くして一ヶ年半を経たる後、東京行の交渉纏まり一座いよいよ花の都の帝都に第二期の成功を遂

ぐ可き運命に遭遇した。暫時の名残りを惜しんで
 稻荷文樂座に開場した處、平素の顧客はいづれも
 彼女が初めての東京行の首途を祝さんとして日頃
 にまさる評判を爲し、御名残興行(七日間)は連夜
 札止めの盛況であつた。彼は此の始めての東京行
 に就ては一方ならぬ心痛をした。夫れは只管東京
 といふ大都會の名に恐れを懷いたので、若し此の
 興行に失敗をしたら再び大阪の土は踏まず、故歸
 名古屋に引退するの外はないと覺悟をした。ホン
 の暫時のお名残興行も彼に取つては一期の浮沈、
 或は之が眞の御名残りになるかも知れぬと千々に
 想を碎き、日頃親しめる顧客や師匠に對しても餘
 所ながら別れを告げたほどである。それゆゑ彼は
 出發の期日確定後は何んどなく悄然としてふさい
 でのたが、梅田驛を發する時などは人知れず涙に
 袖を絞つたといふ。さて愈々乗込んで見れば案す

るより産むが安く其結果は關西地方にも勝つた好
 評であつた。この東京乗込は明治三十一年八月二
 十九日で、九月一日より日本橋區茅場町藥師の宮
 松浦が初興行、一座の顔觸は呂昇及び末虎、廣勝、
 小彌儀、播駒(今の喜昇)、壽(死亡)、昇花(同上)
 小昇(廢業)、花子(同上)の九名で、初日の語物に
 呂昇は寺子屋、末虎は大文字屋、廣勝は日吉丸を
 出した。廣勝の流麗なる語口に次いで末虎の穩健
 なる語口を以てしたので、如何にも配合がよかつ
 た。名聲忽ち四方に傳播して連夜札止めの盛況を
 呈し、其後淺草の東橋亭、兩國の新柳亭、本郷の
 若竹、本石町の橘亭、四谷の喜よし亭、芝の琴
 平亭等到る所人氣の山を爲したのである。殊に若
 竹の如きは再度招致を受け前後四ヶ月間、各席共
 殆んど無前の大入を占めた。當初大阪を出發せし
 際の杞憂と危懼とは今や満足と愉快とを以て掩は

れ、一座の満足は頂天に達した。

十二月三十日若竹亭を打上げ翌日(三十二年一月一日)は横濱市の喜久亭に乘込んで二十日間興行したが之も好人氣であつた、同席打上後静岡、濱松を打ち豊橋を経て同年二月中旬久々ぶりに戀し懐かしの故郷名古屋に乘込んだ。回顧すれば曾て呂大夫に伴はれて大阪に出たのは夫れより八年前の事で、呂昇も當時は世間知らずの一少女であつたが、今や女義太夫界の大立物となつて錦を故歸に飾つたのであるから其得意は到底筆紙の盡し能う所でない。恩師土佐太夫を始め親戚知己を歴訪して、過ぎこし方の物語に時の移るを知らなかつた。同市は千歳座に於て舊正月、元日に蓋をあけたが、開場前より人氣の立つ事譬ふるにもものななく、初日早々場内は錐を立つべき餘地もなき毎夜々々の好人氣で遂に滿二ヶ月間を打續けたとは何と驚くべき勢ひではないか。夫れより岐阜、京都

を打ち此たびは八ヶ月目にして三月二十八日に大阪へ歸つた。同年四月一日よりは千日前の文明館(今の青木亭)コケラ落しに出勤した。初めは十日乃至十五日間位の約束であつたが、連夜大入に引かされ到頭百二十日間興行して同年八月三十一日を以てめでたく打揚げたのである。(つづく)

(五) 油屋席 石子 (堀江)

義太夫藝妓に彼女ほどの美人はあるまいと、堀江最負の客人は鼻蠢めかして吹聴するも道理、天の成せる明眸皎齒、生ける辨財天を拜むやうにも想はるゝは油屋席の石子である。彼は十二歳の時から豊澤廣三を師として義太夫節を始めたが天晴前途の頼母しいので十三歳の冬から油屋席の末吉の妹分として披露をしたが追々芳紀となるに伴れて引手あまたの全盛となつた、こゝに最も珍とすべきは彼の先祖は寛政年間に大力士谷風と拮抗して

雄名を馳せた名力士小野川である、現に石子の家には當時の角力番附が保好してある、即ち東の大關は谷風樞之助、關脇は雷電爲右衛門、小結は鶴渡岡右衛門、西の大關は小野川才助、關脇は玉垣額之助、小結は陣幕島之助であつた、而して小野



子 石 席屋油

川才助の墳墓は人も知る如く下寺町遊行寺内にあつて其石碑には「顯樹院本光學現居士」「文化三寅三月十二日死」と刻つてある、石子は時々參詣して其幽魂を吊ふさうだ、或は何でもよい弗旦と取組んで小野川のやうな名代の手取となりたいので

先祖を頼むのではあるまいかと悪口をいふ者もある、石子、本名は佐々木だつ、今年二九の花盛りで藝の方にも熱心であるから將來いよ／＼發達すべき見込がある、彼の父は小野川才助より五代目に當り祖父は三代目一了軒と號して年こそ寄つたれ素人淨瑠璃岩松連の大將株である、初代一了軒は福島の人で二代目は祖父の兄でいづれも相應の語り手であつたげな、石子が義太夫に堪能なるも祖父の遺傳か又は其風を見習ふたのであらう、更に又遠く其家系を尋ねれば眞の先祖は源家の驍將佐々木高綱の家臣佐々木平右衛門の弟佐々木彌左衛門といふ人で高綱死するに臨み何やらん飴を固めたる如き秘薬をかたみとして平右衛門に與へたのを傳へ／＼て今でも石子の家に秘藏して佛壇に直してあるが不思議な事には家の繁昌する時はいつも其塊物がふくれ衰へる時は縮少するさうだ、當にはならぬが何しろ同家ではさういつてゐる。